

本校における幼児発達相談室の取り組み（１）

～附属養護学校の教育相談システム～

三宅和憲 榊蔵千恵子 田中友佳子

共同研究者：吉川一義 小林宏明（金沢大学教育学部）

１．はじめに

特別支援教育の浸透や発達障害者支援法が施行されるにいたって、小・中学校や盲・ろう・養護学校における教育相談や障害のある子どもへのニーズに対応した取り組み・支援がますます求められてきている。従来からの就学相談に加えて、就学前からの早期教育相談も各地で取り組まれている。

本校においても、一昨年度に早期教育相談事業として「幼児発達相談室」を立ち上げ、大学との連携を利点とした本校ならではの特色ある教育相談システムを検討し、構築してきた。

２．これまでの取り組み

（１）研究初年度の取り組み

研究初年度は文献研究を行ない、他校での取り組みの報告・現状から成功例や課題等を学び、知的障害養護学校での早期教育相談のあり方を考察してきた。さらに、本校の早期教育相談である幼児発達相談室のリーフレットを作成し、保育園や医療機関等の各施設に置かせていただいた。幼児発達相談室の試行として、本校入学が決定した幼児に対し、大学教員と共に発達の様子や今後の支援の方法を助言したり、在籍する保育所への訪問を行ってきた。

（２）昨年度の取り組み

研究の２年次にあたる昨年度は、校務分掌上での教育相談部の位置づけを明確にし、幼児発達相談室（開設２年目）、幼児教室（新規開設）の取り組みを行ってきた。

幼児発達相談には、コミュニケーションに関すること、障害による発達や行動について、それに対する支援の方法を求めて、また就学を目の前にしてわが子に適した学校を選択する不安から相談が寄せられた。来室相談では、大学教員および本校教員が実際に対象児の様子を見て、発達の現状を解説し今後の具体的な支援の方法等を提供した。

幼児教室は、自閉症およびコミュニケーションに困難を示す発達障害幼児に対して、小集団によるコミュニケーション支援を行なった。小集団（５名）での活動を通して、スーパーバイザーの大学教員の協力を得て、来室児のコミュニケーションの状態をインリアル・アプローチの視点からビデオ分析し、今後の支援の方法に反映する取り組みを行ってきた。

３．今年度の取り組み

昨年度の校務分掌の再編により、教育相談部を支援部に位置づけた。今年度は特別支援教育コーディネーターとして、幼児発達相談担当、教育支援相談担当、就労生活相談担当の３つの担当が配置され、幼児から大人まで障害のある方を対象に、発達、教育、就労、生活の分野において、校内外のニーズに応えるべく、本校の相談・支援事業としての体制

の一本化が話題となっている。

幼児期の相談・支援を行なう幼児発達相談（早期教育相談）は今年度3年目となる。金沢大学との連携を利点とした本校ならではの特色ある教育相談システムがさらに良いものとなるよう、以下の取り組みを行なってきた。

- (1) 幼児発達相談室の取り組み
- (2) 幼児教室の取り組み
- (3) 幼児教室に対するニーズの把握

(1) 幼児発達相談室の取り組み

幼児発達相談室は大学との連携を活かした早期教育相談である。来室相談の実際としては、対象児と本校教員が相談室（プレイルーム）で遊んでいる様子を、保護者と大学教員（または本校教員）が同室でその様子を見ながら、コミュニケーションや発達の状態について面談を行なった。保護者の相談を受けて、今後の支援の方法等を適宜助言している。幼児発達相談室の内容（例）については以下の【表1】の通りである。

また、幼児発達相談室、幼児教室の案内のためのリーフレットを作成（更新）し、関係諸機関等へ配布した。

【表1】幼児発達相談室の内容（例）

	対 象 児	保 護 者
14:30 ～ 16:30	本校教員との 自由遊び	自由遊びを観察しながらの大学教員 (または本校教員)との面談 →今後の支援の方法の助言



【写真1】リーフレット

(2) 幼児教室の取り組み

昨年度、幼児教室は参加した保護者から多くの好評を得た。開設2年目の今年度は、軽度発達障害の子どもを中心に7名の小集団（昨年度は5名）で実施した。

小集団での活動として、対象児は自由遊び（25分）と設定場面のホットケーキ作り（30分）を行ない、保護者は活動場所近くの別室で、ビデオカメラで活動場面全体を撮影した様子を、リアルタイムで大学教員と共に観察する。対象児が担当者や友だちとかかわる様子や、担当者が具体的に対象児に働きかける様子を見ながら、大学教員からの助言を受ける。また、対象児のコミュニケーションの状態をインリアル・アプローチの視点からビデオ分析し、今後の支援の方法に反映していく。幼児教室は9～11月に継続して4回実施する。

自由遊び等の小集団活動を行なう場所として、昨年度は校舎内のプレイルームを利用した。本校児童生徒の下校時間と重なり、対象の子どもの行動に少々影響が見られた。そこで、今年度は本校敷地内に併設されている生活訓練棟「すずかけの家」を利用することにした。家庭的な要素をもつゆったりとした空間で、子どもたちは他の刺激を受けずに活動することができた。

小集団活動の内容として、自由遊び（25分）と設定場面のホットケーキ作り（30分）を

行なった。自由遊びにおいては毎回用意する玩具やその配置等を、7名の対象児の様子を見ながら工夫した。ホットケーキ作りでは、材料を混ぜたりフライ返しで裏返したりする場面で活動する機会が少ない幼児もいる。材料やホットプレート、テーブルの数を増やすことで参加しやすいように配慮した。第3回では活動の区切りとして「お集まりの会」を設ける試行を行なった。

好評だったテレビモニタでの視聴システムは今年度も継続して行ない、建物の2階にある和室を利用した。

【表2】幼児教室の活動内容

	対 象 児	保 護 者
14:30	小集団活動（幼児7名）	大学教員と、対象児の活動の様子を別室モニタで観察 →適宜、解説・助言
）	・自由遊び（25分）	
16:30	・ホットケーキ作り（30分）	



【写真2】幼児教室での活動の様子



【写真3】テレビモニタで視聴する保護者

幼児教室の実際として、かかわる大人はインリアル・アプローチの視点から次のことを意識している。

一つは「コミュニケーションの原則」。1. 子どもの発達レベルに合わせる。2. 会話や遊びの主導権を子どもに持たせる。3. 相手が始められるように待ち時間を取る。4. 子どものリズムに合わせる。5. ターン・テーク（やりとり）を行なう。6. 会話や遊びを共有し、コミュニケーションを楽しむ。

もう一つは、かかわりの基本姿勢「SOUL」。子どもが場面に慣れ、自分から行動が始められるまで静かに見守る（Silence）。子どもが何を考え、何をしているのかよく観察する。子どものコミュニケーション能力・情緒・社会性・認知・運動などについて能力や状態を観察する（Observation）。観察し、感じたことから、子どものコミュニケーションの問題について理解し、何が援助できるか考える（Understanding）。子どものことばやそれ以外のサインに十分に耳を傾ける（Listening）。

さらに、子どもがどのような意図をもっているか、大人の意図が伝わっているか意識しながらかかわっている。

毎回の自分のかかわり方を上記の観点から振り返ることができるように、かかわりのチェッ

(3) 幼児教室に対するニーズの把握

幼児教室全4回終了後の12月に事後アンケートを実施し、事後アンケートを基に以下の観点で幼児教室に対するニーズの把握を行なった。

① 幼児教室参加の動機

少人数での活動の中で、他の子とどのようにコミュニケーションをとるのかを知ることができる。また、専門の教員のビデオ分析によって、幼児のコミュニケーションの状態を知ることができる。

② 大学教員と相談できる魅力

専門性が高く臨床経験も豊富な大学教員から、幼児の発達の様子や今後の支援の方法についての具体的な視点とかかわり方法を提供してもらえる。また、疑問に感じることを相談できる。

③ 大学教員からの助言・解説

幼児の気になる行動や会話について、テレビモニタを見ながらその場で、大学教員から客観的に分かりやすく話を聞くことができる。

④ テレビモニタ視聴システム

保育園・幼稚園での様子もなかなか見る機会がないが、自分の子どもの他の子とのかかわりや教員とのやりとりの様子を、テレビモニタを通して実際に見ることができる。また、かかわり方を知ることができる。

⑤ 幼児教室で満足した点

専門性の高い教員に幼児の様子を見てもらい分析してもらえるのが一番の魅力である。テレビモニタでの視聴も他にない取り組みで良かった。

また、幼児本人が毎回、この幼児教室を楽しみに参加することができた。少人数の活動ということで、普段見ることができない様子を見ることができ、就学を前にして、幼児について新しく知ることができた。保護者が幼児との会話や対応面での注意点を学ぶことができた。

しかし、改善する点もある。少人数の集団として7名を対象にしたが、活動中複数の声が重なり合い、ビデオ分析する際に聞きづらかったこと。保護者においては、人数が多く大学教員の助言・解説の場で、質問がしづらかったために十分に話が聞けず、幼児教室終了後に個別に相談しなければならなかったこと。が挙げられる。幼児教室全4回終了後のアンケートでも、少人数の集団として4, 5名が適当であるという回答を得た。

また毎回のビデオ撮影を依頼していた学生ボランティアの確保にも課題が残った。

4. まとめ

幼児期の相談・支援事業として幼児発達相談を行なってきた。

昨年度の教育相談電話受付は年間で54件寄せられた(中学部・高等部教育相談を含む)。今年度は11月15日現在で35件(中学部・高等部教育相談を含まない)寄せられている。就学前の乳幼児を持つ保護者等からの電話受付は33件で、相談内容としては、自閉症等の障害への不安に関するもの、ことばの遅れに関するもの、支援の方法に関するもの、就学問題に関するもの、0～2歳児の発達に関する内容である。

幼児発達相談の来室相談では、相談者より普段の様子をじっくり聞いたり、本校教員とかかわっている対象児の様子から、子どもの実際の姿・行動を観察し、相談者に対して大

クシートを用意した。

また、幼児教室（全4回）各回終了後、保護者に小集団活動においての子どもの様子についてのアンケートを以下の内容で実施した。

- 今回、お子さんの様子はいかがでしたか？
- 今回の活動で、普段見られないお子さんの様子がありましたか？
- お子さんのことで気になった様子（コミュニケーション、行動など）はありましたか？
- お子さんと担当者のかかわりはいかがでしたか？
- 大学の先生や他のお母さんたちと、お子さんの様子を別室のモニターでご覧になってのお話はいかがでしたか？

保護者からのアンケートによって、注目している点の所在が分かり、保護者からの質問に対してもビデオ分析から見えたものを報告することができた。

また毎回、幼児教室での様子や次の回の目標等について書かれた分析メモを保護者に渡し、第3回の活動終了後、保護者と情報交換の場を設けた。

コミュニケーション分析の実際は、録画されたビデオから担当者が、それぞれの対象児のトランスクリプト^{*1)}を作成した。

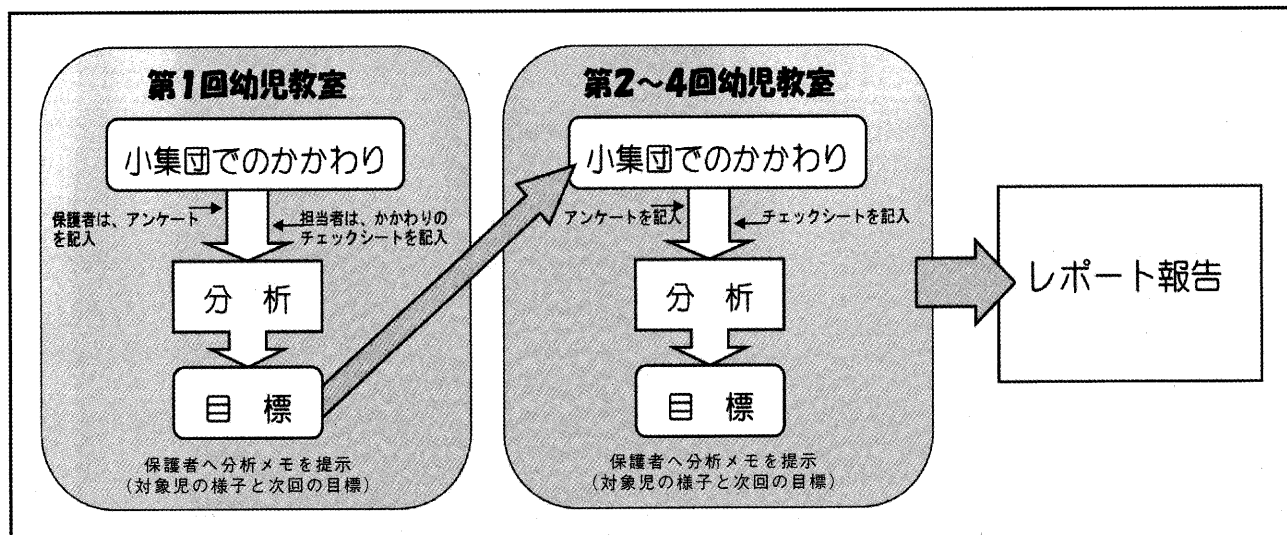
幼児教室を行なった1週間後のグループ研究会において、7名の対象児についてのトランスクリプトを基に、ビデオで活動の様子を見ながら、対象児のコミュニケーションの現状を分析・把握し、今後のかかわり方について協議した。幼児教室でのコミュニケーション分析から得たことを、今後のコミュニケーション支援の方法として、12月中旬に保護者へ報告した。



【写真4】ビデオ分析の様子

*1) コミュニケーションのどこを詳しく見直すかを決めて、ビデオでの様子を文字に変換した資料。

【図1】幼児教室の流れ



学教員および本校教員から対象児の行動についての理解の視点とかかわり方法を提供することができた。

幼児教室においては、保護者に毎回アンケートを実施したり、保護者へは分析メモを提示してきたことで、毎回の幼児教室における目標や家庭での様子など、スタッフと保護者間で相互に意見交換ができたため、有意義な運営や実践ができた。

事後アンケートからも分かるように、専門性が高く臨床経験も豊富な大学教員から、対象児の発達の様子や今後の支援の方法についての具体的な視点とかかわり方法が提供されることや、幼児教室での小集団活動や、コミュニケーション支援、テレビモニタでの視聴システム等、大学との連携を利点とした本校ならではの特色を明確にすることができた。

幼児発達相談を専門にするスタッフが不在であるため、多くの相談には対応できない面はあるが、子どもの障害に関する情報センターとしての役割を担い、附属養護学校である本校独自の取り組みで、保護者が子どもの状態を正しく受け止め子育てに自信を持つことができるような支援の提供や、幼児教室の活動を通して、育ちに即した具体的な環境調整や子どもへのかかわり方等を保護者に提案することができる。

<参考文献>

- 1) 独立行政法人国立特殊教育総合研究所教育相談センター編 (2004)
「障害のある子どもの教育相談マニュアル Ver. 1 はじめての教育相談」
- 2) B・バックレイ著(2004)「0歳～5歳児までのコミュニケーションスキルの発達と診断 子ども・親・専門」
第7章「コミュニケーションに困難を抱えた子どもたちの親とどう関わるか」
- 3) 大井学・大井佳子編 (2004)「子どもと話す～心が会える INREAL の会話支援～」
- 4) 竹田契一・里見恵子 (2005)「実践インリアル・アプローチ事例集～豊かなコミュニケーションのために」